



ヨコミゾマコト

Makoto YOKOMIZO

ありきたりを嫌う気鋭の建築家がつむぐ夢は、環境の変化にも、時間の経過にも耐え得る建築デザイン。「相互補完」が「自己最適化を図ること」であるなら、建築には、その目的と補完し合う柔軟性こそが求められる。

ピザボックスの中につまったシャボン玉は、美術館の中のまあるい展示室。それは、誰も経験したことのない空間の創造。

COM vol.21

CONTENTS

	COM TALK	長谷川理恵	2
	Front Line 建築家インタビュー	ヨコミゾマコト	3
	Arrangement 納入事例	亀田第一病院	8
		b6	10
		パシフィックタワー目黒不動前	12
	Topics トピックス	乗込口のさらなる省スペース化を実現する「ターンテーブル地下旋回タイプ」の最新事例	14
		バリアフリーデザインで、ハートビル法をクリア	15



Information
COMプレゼント 16

現在、RV車とタウン車の二台持っています。全く違うタイプの車なので気分や用途によって使い分けています。

以前、テレビの番組でホノルルマラソンに出場してから、すっかりマラソンにハマってしまっ、もう七年続けています。この十二月もホノルルマラソンに出場し

COM TALK

長谷川理恵



マラソンのトレーニングは、日は皇居の周りを走っています。車と違って身体をつかって走りますから、毎日同じコースを走っているのに、いつも新鮮な気持ちになれるんです。走るにしたがって次第に神経が集中して、五感が敏感になって景色が自然に飛び込んでくるんです。お堀の水面の輝きや枯れ葉の鮮やかな色合い、初冬の匂いまで強く感じてくるんです。今朝も鴨が二十羽ほどいたんですが、それが凄く感動的で。これは車では味わえない特徴ですね。

機械式駐車場を利用することが多いんですが、車の向きを変えるターンテーブルのある駐車場は問題ないのですが、それが無いところは駐車場に入れるのに何度も切り返しが必要なので、「大変だー」ってうちのマネージャーさんは言っています。

ました。週に一度、コーチと一緒に千葉県で練習するんですが、そんなときなどRV車は楽ですね。サーフィンも好きで、板(サーフボード)を運ぶのにも、とても重宝しています。

室内が広いので気持ちがいいです。部屋で音楽を聴いているような感じで往復の時間も苦になりません。

マラソンのトレーニングは、日は皇居の周りを走っています。車と違って身体をつかって走りますから、毎日同じコースを走っているのに、いつも新鮮な気持ちになれるんです。走るにしたがって次第に神経が集中して、五感が敏感になって景色が自然に飛び込んでくるんです。お堀の水面の輝きや枯れ葉の鮮やかな色合い、初冬の匂いまで強く感じてくるんです。今朝も鴨が二十羽ほどいたんですが、それが凄く感動的で。これは車では味わえない特徴ですね。



Rie HASEGAWA

プロフィール タレント

神奈川県出身。大学在学中に、雑誌「Can Can」のモデルとしてデビューし、人気を集める。その後TV、ラジオ、雑誌等で活躍するが、最近ではマラソンランナーや野菜ソムリエとして、そのカジュアルでヘルシーなライフスタイルに同世代の女性から高い支持を得ている。著書に「Rie's CODE カジュアルビューティの法則」(幻冬舎刊)現在、BS-i「メディカルa」ではMCを務めている。

それと最近のことですが、最先端のビルの駐車場にRV車を入れるのに高さが足りなくて入れられなかったことがありました。大型車も増えてきていますので、ぜひ高さのある駐車設備をお願いしたいです(笑)。

私の住んでいるマンションの地下駐車場も機械式なんです。(編集部「ひょっとしたら長谷川さんのところも当社の製品かも知れませんか。そうなんです、便利に使っています。」)

ホームページ上の定点観測画像はドキュメンタリーとしての建築記録

せんだいメディアテークのプロジェクトでは、着工から竣工までの経過を定点観測し、ホームページ上で公開していました。社会的にも重要度の高い仕事でしたので、ドキュメンタリーとしてきちんと記録しておくために始めたことです。

何十年後の歴史家が、これを見つけて研究材料にしたり、あるいは街のひとつの変化・都市の歴史をたどる資料として生かしていただければ有難いです。資料が存在する、ということが重要なのです。公共性のある施設の建

設では、リアルタイムでアップされる定点観測画像は、情報の公開・共有という役割も果たします。

海外の建築メディアの関係者にとっては、話題の建物ができていくところを現在進行で見られる、というのが喜ばれていました。そのために、バイリンガルにしてあります。何度か海外メディアでも掲載されました。

建築ができていく過程と、結果としての建造物と。比較してどちらが、という優劣ではなくて、私にとっては、そのどちらに関心があります。



神楽坂駅から徒歩2分 若者のあこがれデザイナーズマンション

住宅地に建てる集合住宅の場合、法律上の制約から形が決まってしまうというケースが多々あります。地域ごとに異なる複雑な形態規制は、当然それに従わなければ建築物を建てることはできません。自由に物を作りたいという我々にとってはストレスですが、それをポジティブに捉えて、逆にその規制された形をそのまま見せるというや

り方もあります。

この「KEM」という東京・神楽坂の賃貸マンションのケースでは、北向きで狭い道路に面し、住宅が密集しているというマイナス面を、そこに設計者がかかわることで、プラス要素をどれだけ増やせるかということがプロジェクトの課題でした。外観の複雑さは形態規制のため。



神楽坂集合住宅「KEM」

部屋の大きさや、家賃設定など複雑な要素がいろいろからんだ結果、容積をいっばいを使って、小さな部屋をたくさん作ることにしました。分譲マンションであれば難しい、背が立たないような空間さえ、若者向けの賃貸であれば、それを楽しんで住むという発想も可能になります。すべて間取りが異なる十三戸という魅力。

シャボン玉を模した丸い展示室 絵の存在感と建物の包容力が作る均衡

富弘美術館のコンペに参加するとき、まず自分の中にあるイメージを持って、敷地や星野富弘氏の絵を見に行きました。

平屋建てで正方形の建物にしよう。敷地いっばいに建つピザボックスのような・・・丸い部屋にするかどうかについては、最後まで若干迷いがありました。ほかのアイデアもなくはなかった。我々が今までに建築として体験したことのないような空間を作りたいかったのです。

富弘さんの絵には、優しいけれども、インパクトのある強い存在感があります。その絵の持つ強さに負けない、はつきりとした主張のあるデザインを目指していました。絵もあるけれど、建物もある・・・そんなイメージです。そのためには、あまり絵のことばかり考えてはいけません。

多くの美術館では展示室に関してはあまり主張しないで、エントランスホールや外観で建築家は勝負しようとする。そうした、よく有りがちな美術館を繰り返し作っても仕方がないでしょ

う。

富弘美術館は、星野さんというひとりの画家のためのものであるし、どの作品の大きさもほぼ同じ。展示方法も作品の重要性や知名度にはこだわらず、平均化して並べて、作品の展示方法によって新しい魅力が生まれるように工夫して行われています。その意味では、始めから終わりまで一方向的に流れるように見終わったときに、ひとつの物語を読み終わったような気分になれる。丸い展示室に順番はあるけれど、優劣や階層性はありません。

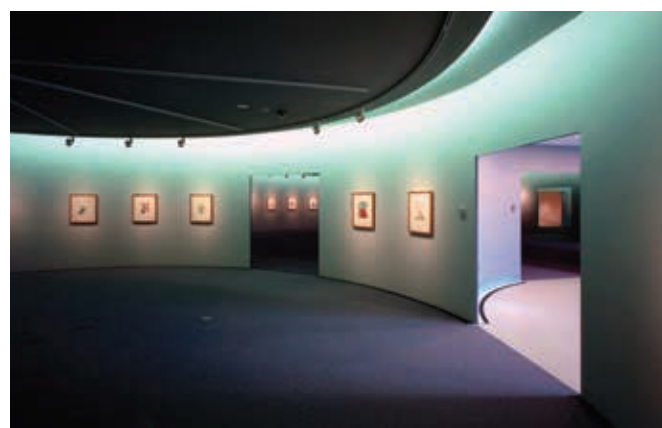
円筒形の展示室と展示室の間の隙間は庭になっています。見る人と作品の間に、全然違う他者を介在させたいと、私は考えました。富弘さんの絵のテーマでもある自然こそが、その他者としてふさわしいはずで、一年に一回は花を咲かせてくれて、富弘さんの絵に描かれているような、地元の村に自生している雑草を選んで、空いた三角形のスペースに植えました。



KEM内部



KEM内部



富弘美術館内部



富弘美術館

建築の存在価値の永続性は
環境の変化への最適化から生まれる

相互に補完する円筒形の集積。そこに見られる自己最適化とは、状況の変化に対応して全体を構成する部分が、自身のあり方を変えていく現象をいいます。その変化は、常に全体としてどうか、ということをやフィードバックさせながら、次を考えていく。それは、限られた池の水面上に、蓮の葉が広がっていく様に似ています。それぞれの葉が最大限に光を浴びながら、他の



葉と共存しつつ自らの大きさを決定する。自己最適化とは、部分部分が全体を常に省みながら、自分の姿、在り様を環境と対応させながら、変化させることです。それは、我々自身も行っていいこと。
建築の自己最適化のためには、設計者が多くの人々と関わりながら考えることが大切です。特に田舎の村にとって、子どもたちは未来の担い手です。美術館を運営する、次の世代である子どもたちを建設途中から工事現場に招きました。こんなものができていくんだぞ、ということを見てもらうワークショップを二週間に一回ぐらい開いたのです。

建物自体も、機能をできるだけ固定しないで、一度作ってしまった壁はなかなか変えられませんが、発想次第でその空間の使い方が変えられるように意識しました。時間の経過と使う人たちによって、建築がいかに継続的に存続し続けるか。どこまでそれが実現したかは、二、三年で答えの出るものはありません。

「浮かぶ熱帯」 宙を泳ぐ金魚
デジタルPBXによるインスタレーションの世界

建築設計の仕事で、水平垂直、上下左右というものにはばらばらにしているせいか、手がけているインスタレーションの作品では、そういった規制から開放されたいという願望があります。私は友人である加藤弘行氏とデジタルPBXという名前のユニットを組んで活動を続けています。一九九六年に初めて銀座のギャラリーで開いた個展では、会場全体を半透明のシートで覆い、繭玉のような空間を作りました。タイトルは「浮かぶ熱帯」。天井からは本物の熱帯植物の固まりが吊り下げられています。ギャラリーに入ると、



浮かぶ熱帯

それだけで非日常性が生まれます。二〇〇〇年に、日蘭修好四百年を記念して開かれたコンサートのための作品が「人の造りしもの」です。これは富弘美術館の発想に近いもの。ピアニストと観客の緊張関係の間にまったく違う次元で存在するものを介入させようと考えました。それが金魚。観客の数と同数の生きた金魚をビニール袋の水の中に泳がせて、立体格子状に吊りました。
建築でできないことがやれる。アートの活動。自由な発想で作れるところを楽しんでいます。

人が集う、コミュニティの場としてのパーキングへ



塩尻コンペ案

車
は好きです。

少し都市計画的に考えるべきです。その公共性を考えれば立派な都市インフラなのです。ヨーロッパの街では歩道とパーキングエリアが並置され、車と街とがきちんと共存し、ひとつの風景を作っています。ところが日本では駐車場という場所は用意されていますが、情緒性はまったくない。一方で道路上は禁止事項ばかり。もっと都市空間と駐車場とが自然な形で共存できないのでしょうか。

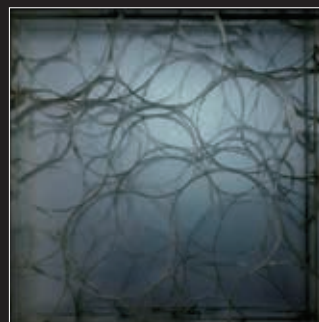
東 京都心の公共駐車場にも機械式がありますね。道路の地下などに機械式駐車場を設置するのは、有益だと思います。スピード、メカニック・・・最新のテクノロジーが使われていて魅力的です。

ガ レージハウスの設計もしています。愛車を眺めながら生活できる家を作りたい、つまり車のコミュニケーションの場としての住宅というオーダーなのですが、コミ



塩尻コンペ案

ュニケーションという話題のときに時々出す話があります。ある会社の社員寮の中庭に駐車場を作った建築家がいいます。そこでは、会社では会話が交わらない住人同士が、週末になると洗車しながら車の話題で盛り上がるわけです。このような、車を介してのコミュニケーションをアレンジするというデザインもありえますね。この考え方は公共のパーキングでもできるかも知れません。



武蔵境コンペ案

P R O F I L E

ヨコミゾマコト (Makoto YOKOMIZO)
1962年神奈川県生まれ。東京芸術大学美術学部建築科大学院修了。伊東豊雄建築設計事務所を経て、2001年aat+ヨコミゾマコト建築設計事務所設立。

主な受賞歴

2002年群馬県東村立新富弘美術館建設国際設計競技最優秀賞を受賞。2003年には、日本産業振興会グッドデザイン賞とカナダグリーンデザイン賞を受賞。2004年東京建築士会住宅建築賞奨励賞を受賞。2005年には同賞金賞を受賞。2006年富弘美術館で日本建築学会賞、International Architecture Award受賞。

aat+ヨコミゾマコト建築設計事務所
http://www.aatplus.com/

